
ミサル天空の想い人

紅鈴桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミサル天空の想い人

【Nコード】

N1818G

【作者名】

紅鈴桃

【あらすじ】

気になるなら読んでいってください！！

第一話 女王誕生

この物語の主人公に当たる人物「ユキ」は、幼い頃生まれ故郷「聖董儀協国」をはなれ隣の国

「セルン」の王「ゼン」の養子になった。

ユキは、すくすくと育ち、今では国一の美女と言われほかの国々でも、有名になった。

ユキが十五の春、養父ゼンが

「王位をユキにゆずる」

と、民に発表した。

すると国中大騒ぎ！

パレードみたいに大騒ぎ！

城の中はもつと大騒ぎ！！

――数日後

まだ城の中も、國中騒いでいた。
それもそのはず……ゼンまでずーと男が勤めるのが王の
たった一つの決まりだったからだ。

ゼンも、もちろんそのことを知っていた。
その上でユキを養子とし、結婚もしなかった。
……この国を……かえるために。

第二話 ユキ

そのころ、大騒ぎだった城の中にもたったひとつだけ静かな部屋があった。

その部屋には、立派な彫刻が壁を埋めるように描かれており、天井には、国一の画家が描いた絵が飾ってある。いかにも貴族らしい部屋だ。そこにたった一人少女がいた。

・・・その少女が王の養い子「ユキ」だ。
(煩い！この騒ぎいつ終わるのよ！)

ユキは、怒り狂い机を一発殴った。そして心の中で叫ぶ。

あの煩い城のものどもめ、私が王になったら全員解雇してくれる！

その瞬間、机がぼきっ！と派手な音を上げ二つの木片が美しい白の絨毯に崩れ落ちた。

さらにユキは、その絨毯を捲り上げ扉に向かって叩きつける。

「あつつつつのクソ親父！！何考えてんのよーーーー！！」

王女とは思えぬ悪態をつき、ユキはさらに壁に飾られた父王の肖像画に拳を一発。

「何なのよ何なのよ！！私がいっつ王にしてくれとたのんだのよー

ーーーー！！」

城のすべてに木霊するような怒鳴り声を上げ、ユキは突然笑いだした。

「ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ」

そして、幽霊のようにふらふらとベランダにでた。

ここは、父王の執務室。

つまり王の執務室。

偉い人の執務室。

こわしちやいけない執務室。

とても立派な執務室。

机1つで家が100件くらいたつ執務室。

とってもすごい執務室。

凡人は一生見れない執務室。

全てあわせて、やっぱり王の執務室。

ユキは、その部屋の惨状をとてもしそつに見やり一言言葉を紡いだ。

「案外楽しかったわ、おバカな父上。そして、永遠にさようなら・・・」

そして、ユキはベランダから飛び降り10mほど下に猫のように着地した。

そこは、城の外側に突き出た通路。そこには、麻で出来たリュックと手提げが置かれていた。

最後に彼女は、空を見上げ憤然と呟く。

「私を王にしようなんてこの世界が出来た年月があっても足りないくらい早いわ。いいえ、そんな時はこない」

そして、ユキは通路から姿を消した。影も形もなく。

その日、城中の人間が愕然とする出来事が起こる。

『セルン次期国王、ユキ・レイス・ミレーユ・オブ・セルン失踪』

第三話 さみしさ

チュンチュン、チュンチュンと、鳥のさえずりが聞こえる。
ユナは、朝地面に新聞らしい紙が落ちているのにきずき

「えええええー！何よ。この紙、嘘だらけじゃない。」

と小声で怒っていた。

それもそのはず。

ユナは、【失踪】ではなく【家出】なのだ。
似た様な物だが、ユナは違うと思っていた。

ユナはばかだった。

ユナはいちよう王女だが、勉強の時間はいつも抜け出していた。
だから、・・・まあいえば文は読めるが書けない、知識は六歳並みだ。

外見は可愛いが、頭は空っぽ。・・・そんな彼女に恋するものは多い。

『ユナに恋した者は、城に来い』

王の命令に従い城に来た若者達は、皆王女はおしとやかと言つイメ
ージがあつたらしく

暴れん坊のユナを見て心が折れたらしく、諦めていった。

ユナがその事をしるのはいつの事だろう・・・。

―数日後―

もう秋がすぐそこまで近いてきている。

ユナはたき火をしていた。

「ふうーさつみー……………もうすぐあ…………き…………
ハ…………ハクシユン！」

ユナは寒さのあまりクシヤミをした。

「大丈夫…………で…………すか？」

と女の子の声がして、小さな布がでてきた。

「……………ありがとう……………あなた……………」

「あ、私ったら名乗らずに……………ごめんなさい……………あの美姫って
います。」

「私は……………」

「あ、知ってます。ユナ様ですよね。」

「え、なんで……………しってるの」

「だって私は……………ユナ様の故郷「聖堂儀協国」からの使い。知っ
てるのは当然です。」

「私は、この地で生まれた人間よ！この国から一步も出たことがないのよ。そんな人が隣国で生まれたはず、ないでしょう。」

「あら、ゼン様に聞いてなかったんですね。あなたは立派な「聖堂儀人」です。」

ユナは、動揺しているのを隠しながら言った。

「…同盟国である「聖堂儀協国」からの使いがくるのは何かあった時だけのはず。」

「はい、そのとうりです。さすがユナ様、よくご存知ですね」

美姫が褒めてくれたので、ユナは嬉しかった。

「ここにずっといると風邪をひきます。私の家に行ってゆっくりお話をしましょう。」

こうしてユナと美姫は美姫の家へと続く道を歩いていった。

ユナと美姫^{みき}がやりとりをしてる時の少し前、城ではユナ様がいらない？、と女官達が騒いでいた。

「騒がしいぞ、何かあったのか？」

後ろから大きな声がしたので、女官達はぎょ、とした。

「まあ、ゼン様…いつから？」

「さっき、用をたしに行ったら、騒がしかったからな。今来てみた
だけだ。」

「実は…ですね、ユナ様が行方不明で…」

「予想どおり…だな。」

「……？」

「時期にわかる。」

暖かい家

ユキは通された美姫の家を見て啞然とした。

美姫の家は思いっきり畳の純和風だったからだ。

「わあゝすごい木彫りの熊ねゝミスマツチゝ」

ユキが部屋を見渡していると障子が開き、美姫が戻ってきた。

両手に湯気が上がる緑茶を持っている。

ユキはそれを手伝ってあげた。

二人はコタツに入る。

「さて、ユキちゃん、お茶会しよう!」

「え?何でお茶会?」

「じゃあやならおしくらまんじゅうしようよ。体が暖まるよ」

「え、コタツで暖かいからいいよ」

ユキは遠慮したが美姫は聞かない。

ずんずん近寄ってくる。

そして二人は両方のお尻を合わせると歌いだした。

『おしくらまんじゅう泣いたら負けよ』

それって何か違うよねーと思いながらも押し合う。

その様子を外から見つめる人物が数人。

「ユキ・・・」

ゼンは言葉をこぼした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1818g/>

ミサル天空の想い人

2010年10月11日16時35分発行